

宮澤賢治論

—— 作品に於けるデクノボウ像 ——

岡屋 昭 雄

目 次

1. はじめに
2. 作品に見るデクノボウ像
3. デクノボウ像形成にかかわって
4. おわりに

1. はじめに

賢治の亡くなる二年前に書いたといわれる手帳、俗にいう「雨ニモマケズ手帳」が、賢治の死後、原稿が詰め込まれたトランクから発見される。この手帳に書かれてある手記「雨ニモマケズ」の詩が賢治の思想の集大成として広く世間に知られていることは周知の事実である。賢治の菩薩思想もこの詩に由来するのであり、哲学者の谷川徹三は、「この詩を私は、明治以来の日本人の作った凡ゆる詩の中で、最高の詩であると思っています。もっと美しい詩、或はもっと深い詩というものはあるかもしれない。しかし、その精神の高さに於いて、これに比べ得る詩を私は知らないのであります。この詩が今日の時代にもつ殆ど測り知ることのできぬ大きな意味——これは結局宮澤賢治という詩人が今日の時代にもっている意味であります、・・・」⁽¹⁾と、最大級の高い評価をし、これに対して中村稔は、「雨ニモマケズ」を「宮澤賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたらぬ作品のひとつであろうと思われる。」⁽²⁾と、谷川と対極に位置する全く逆の評価をする。そして、この詩は羅須地人協会から全面的退却であり、『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北であると、大胆な賢治批判を展開する。この中村の批判に対して反論を谷川は展開する⁽³⁾、いわゆる谷川・中村との論争となる。「雨ニモマケズ」の詩の世界・宇宙を菩薩道・賢者として捉えた谷川と、羅須地人協会からの全面的退却であり、『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北であると捉え、積

極的な意味を見いださなかった中村との両論に対して、他の研究者・評論家等から真の賢治像⁴⁾が問い直される機会となったことは周知の事実である。

ところで、この「雨ニモマケズ」は1931年1月3日の日付けが記してあり、いわゆる「雨ニモマケズ手帳」に書き残されていた詩であり、発表する気持ちは賢治にはなかったと推察できるのである。ついでに言えば、異稿「くらかけ山の雪」とほとんど同時期に書かれている。『春と修羅』第三集に見られるような農民に対する嘲り、怒りが全く見られなくなっていることに着目することができる。賢治の羅須地人協会の活動の挫折とそれからの全面的退却、『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北の挫折を体験しつつも、晩年の賢治の行き着いた到達点を示す思想・理想であることは否定できない。「雨ニモマケズ」の詩のデクノボウ像は、「ヨクミキシワカリ」であり、「ソシテワスレズ」の人間にとって理想的世界なのである。

確かに、この詩にも賢治の挫折感が色濃く表出されている。「ヒデリノナツハ」涙を流すのみであり、「サムサノナツハ」オロオロ歩くしか他に方法はないのであるから。賢治は、科学者として、完全に敗北することになるのであり、そのことは結局、東北の、とりわけ、賢治の目の届く範囲に住む農民を救済できなかった心の痛みは、身体的にも精神的にも大きな打撃・影響を受けたこととしては疑問の余地はない。

なお、「雨ニモマケズ」の詩をどのような立場で見るかによって、その評価が異なって来るのである。つまり、大正12年8月の妹トシを求めての北への旅をどのように意味付け・価値付け、そのことと、「雨ニモマケズ」の詩とどのように関連付けるのが問題となるであろう。亡くなった妹トシ探しの為に最北の地である当時の樺太庁のある豊原から北へ約40キロの地点にある榮浜を舞台にして作られた「オホーツク挽歌」、童話「サガレンと八月」、「タネリはたしかにいちにち噛んでみたやうだつた」の三作品を関連させて考慮すれば、分明になることであるが、恩田逸夫の述べるような〈宇宙の根源的生命力への帰依〉(《宮澤賢治論》| 2 | 詩研究 | 東京書籍 1981年10月に「宮澤賢治挽歌の中心課題とその展開」に述べたもの)であり、つまり、肉親への愛と宗教的愛との相剋を解決できたのであり、万人万物の幸福のために尽くすことが、そのまま妹トシの救済となると

いう思想に到達したのである。したがって、心象スケッチという観点からすれば、詩章「風景とオルゴール」以降の作品は、心象詩と呼ぶことはできない。したがって、「雨ニモマケズ」の詩も、心象スケッチという観点から評価できないことになる。このことを明確にしなければならない。谷川は、哲学者という立場からその高い賢治の志を評価したものであり、それに対して中村は、詩人の立場から述べたのであり、あくまでも詩のレベルで論じたのであり、今後、この両者を止揚統一する論拠を明確にして「雨ニモマケズ」を再評価すべきであろう。したがって、筆者も「雨ニモマケズ」の作品を賢治の生き方の総決算としての思想・理念として把握しつつも、そのテクノポウ像を形成するプロセスを問題にし、それを作品との関連・関係で評価すべきだとの立場を取りたいのである。

以下、賢治の児童文学作品を通して賢治が抱懐し、人間的理想像にまで高めたテクノポウ像を追究することとする。

2. 作品に見るテクノポウ像

最初に、童話『どんぐりと山猫』を取り上げ検討する。その場面は次のようになっている。

空が青くすみわたり、どんぐりはびかびかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなほりをしたらどうだ」山ねこが、すこし心配さうに、それでもむりに威張って言ひますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いえいえ、だめです、なんといつたつて頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがってるます。」

「いえ、ちがひます。まるいのがえらいのです。いちばんえらいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからえらいんだよ。」

「さうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのふも判事さんがおつしやつたぢやないか」

「だめだい、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しつこのえらいひとだよ。押しつこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言つて、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつまみやうで、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。こゝをなんとこゝろえる。しづまれ、しづまれ。」

別当がむちをひゆうぱちつとならしましたのでどんぐりどもは、やつとしづまりました。やまねこは、ぴんとひげをひねつて言ひました。

この前の場面では、山猫が「陣羽織」を着ており、「やかましい。こゝをなんとこゝろえる…」とを関連づけると、江戸時代の奉行所を想像して読者を遠くにつれ去る機能を果たす。そして一方では、煙草を「ふう」と吸っている情景は、古さと、それでいて流行に後れまいとする、時代に取り残された、結局自分を見失っている人間を象徴する。作品の前半部分が、一郎と自然との対話を通して道を尋ねる繰り返しの面白さ、それでいて変化をもってストーリーが進行するのに対して、この部分は、全く変化もなく、同じ内容の繰り返しの強調がみられる。どんぐり達の争いの原因とそれぞれの自分勝手に、自己中心的な論理は決してかみ合うことのない、現在の人間を精確に言い当てている。それに裁判をする山猫も事態を纏める能力を欠落させており、明らかに風刺がみられ、人間批判を底辺に揺曳する。どんぐり達の争いを詳細に検討すれば、相対的価値を決めることに奔走し、自分が他の者より優れていることを強調するのみで、絶対的な価値基準を指し示すことはできない。「頭が尖っている」、「まるい」、「大きい」、「せいの高い」とはいっても、ある価値基準がなければ無化されるのであり、個人の価値は何物にも代え難い価値を有するものである。したがって、一郎が次のように述べることもまた意味がある。

「そんなら、かう言ひわたしたらいいでせう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなものが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです。」

つまり、一郎は、現在、世間的に通用している価値観を逆転⁽⁵⁾させたのである。したがって、一郎は、トリックスター的な役割を演じ、世間的な常識の世界を打ち破り、新しい価値観を持ち込んだことになる。そして日常の生活を活性化する

ことになった。その場を挙げる。

「そんなら、かう言ひわたしたらいゝでせう。このなかでいちばんばかで、めちやめちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できたいんです。」山猫はなるほどといふふうになつて、それからいかにも気取って、繻子のきもの胸（えり）を開いて、黄いろの陣羽織をちょっと出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しづかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんやらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまひました。それはそれはしいんとして、堅まつてしまひました。

つまり、世間的な常識を逆転させて、日常の世界で一番駄目だといわれている価値観を逆転させていることに気づくであろう。絶対的な価値基準がなく、相対的価値の世界であるが故に、一郎の判決の有効性はあるのであり、日常的な価値基準を逆転させることによって日常の生活の価値基準の在り方を問い直す機能があることになる。佐藤勝治は、昭和二十三年に「どんぐりと山猫」と法華經の第二十章「常不輕菩薩品」との関連を指摘し、次のように述べる。

「法華經は、数々の例を上げて、このデクノバウの菩薩道を説いているのである。己は何を求むるところなく、ただ衆生の成佛を希ふ捨身の道である。これを空觀の菩薩道といふ

法華經第十條法師品に、

「是の善男子善女人は、如来の室に入り、如来の衣を簪、如来の座に座して、爾（しか）して乃（いま）し、応（まさ）に四衆の為に、廣く斯經を説くべし。如来の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是なり。如来の衣とは、柔和忍辱心是なり。如来の座とは一切法空是なり。」とある。

詩人賢治はこれらの難解な教義を、「デクノバウ」といふ一語にあらはしたのである。「ミンナニデクノバウトヨバレ、ホメラレモセズ苦ニモサレズ」——ここに「如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に座して」行ふ真実の菩薩

道がある。ここに所謂宗教家の説教とは無縁な生きてまことの道がある。⁽⁶⁾

つまり、佐藤は、賢治が「デクノパウ」と表現した背景を明らかにしつつ、真実の菩薩道を賢治は掴み取っていると評価するのであり、宗教家の説教とは無縁の「生きてまこと」があるとまで最高の意味づけをする。そして、童話「どんぐりと山猫」の主題と、デクノパウ精神との関連を次のように述べる。

童話「どんぐりと山猫」の主題は、まさに、この「デクノパウ」禮讃であると見られる。つまり法華経教義の眼目である「菩薩」を知らせたものがこの童話である。他のすべての作品と同様に、彼の豊富奔放な空想力によって、楽しくめまぐるしく彩られてゐるが、要するにこの物語は、お互ひに自分が一番えらいと云ひ争ふどんぐり達に、かしこい少年の一郎が、

「この中で一番ばかだめちやくちやでまるでなつてゐないものがえらい。」
と判決を下すところに中心がある。⁽⁷⁾

つまり、佐藤が述べることは、世の中で一番えらい人間は、他人からデクノパウと呼ばれながらも、人のためにひたすら尽くす人間でありたいというスーパーエゴの世界に通じるものであり、童話集『注文の多い料理店』の冒頭に「どんぐりと山猫」を据え、詩集『春と修羅』（第一集）の巻頭に「屈折律」を持ってきた理由も納得できる。この二つの作品は、賢治の思想・信仰の中核をなすものであり、法華経の中核の思想として賢治が解釈したことにもなる。法華経の中に流れる「我は身命を愛せず、俱無上道を惜しむ。」のことばに感涙の涙をこぼしたであろうことは考えられる。日蓮がそうであったように。この拠点に賢治が抱持するためには、農民になろうとしても理解して貰えなかった深い悲しみの慟哭があったことも、『春と修羅』を詳細に吟味すれば理解できる。

これに対して牛山恵は、「2 一郎の判決の意味」と題して、傍観者としての一郎であるとの立場を取りつつ、次のように述べる。

……おそらく、作者は、多くの研究者が言うように、どんぐりどもの争う姿に、人間の卑小さを皮肉る戯画を描いて見せたのであろう。この戯画も、作品のおもしろさの一つである。

そして、登場人物である一郎も、読者と同じ感覚でこの戯画を眺める立場に立っていたと見てよい。一郎はこの裁判がどのように結審しても、なんら影響を受けない。言ってみればまったく無責任に裁判の成り行を眺めることができる存在だった。だから傍観者である一郎はその余裕から、争うどんぐりたちを、愚かだが無邪気でもある存在として見ただろう。⁽⁸⁾

つまり、牛山は、一郎はあくまで傍観者の立場をとり、無責任に裁判を見ることができたというのである。愚かであるが無邪気な存在と見なすのである。この牛山の主張は、子どもがイノセンスな存在であることを看過し、大人の社会（日本においては、世間に対して恥ずかしい、との感情で把握する心性に支えられている。）の秩序の価値を転倒させたり、無化させることができる存在は子どもでなければならぬのであることを無視する。つまり一郎は、トリックスターの役割を果たしていると捉える立場を筆者はとるのである。柳田國男の『毛坊主考』⁽⁹⁾にも書かれているように、中央に対して周縁に位置する者のみが中央を活性化できる存在となり得るのであり、時として犠牲者にもされることにもなるのである。どんぐりたちが、「自分がいちばんえらい」と自己のアイデンティティーの主張であることは分かつても、賢治の主張する「デクノボウ」精神とは対極に位置するのである。したがって、一郎の裁判の立場は、傍観者でも、どんぐりたちの背ぐらべを皮肉った訳でもない。山猫が一郎におかしな葉書を出させたことの意味そのものを考慮すれば、同じ社会内では解決をすることが不可能と判断したからに他ならない、と捉える方が正しいであろう。

村瀬学も「……どんぐりたちはその説明を確かに真に受けた節がありません。シーンとしたのですから。しかしその説明をした本人たちは、決してその意味を理解していたわけではなかったと思われます。というのも、どんぐりの言い分を本気で解決しようとする気があったら、山猫はみやげにどんぐりたちを升ではかって一郎にあげようという気は出さなかつたでしょうし、また一郎も本気でどんぐりの言い分を考えていたのなら、どんぐりを貰ったりはしなかつただろうからです。」⁽¹⁰⁾も述べるのである。が、「説明をした本人たちは、決してその意味を理解していた」わけではない、といわれると、作者である賢治が造型した一郎

の人物に何を託しているのかが問われなければならないことになる。『注文の多い料理店』の広告チラシに「必ず比較をされなければならないいまの学童たちの内奥からの反響です」とあるように、賢治は子ども達の内奥の叫びを掬い取って作品に結晶化させたものである。また、山猫がみやげにどんぐりを一郎に与え、一郎が受け取るという行為それ自体も、前半部分の自然との交流があるが故に素直に首肯できるのである。むしろこのことよりも、「馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車ととまつたときは、あたりまへの茶いろのどんぐりに変つてゐました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つてゐました。それからあと、山ねこ拝といふはがきは、もうきませんでした。やつぱり、出頭すべしと書いてもいゝと言へばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。」の結末の表現のもつ意味を問題とした。つまり、ここには、異世界・非日常の世界と現実の世界との関係を探る鍵があることである。異世界では黄金のどんぐりが現実世界ではただのどんぐりとなっているのであり、山猫が馬車別当に云った「どんぐりを一升早くもつてこい。一升たりなかつたら、めつきのどんぐりもまぜてこい。はやく。」に隠されている意味を解説・解釈することが重要であろう。「めつき」の意味が内包する世界は必ず剥げることであり、一郎が現実世界に帰ったらそのことを知ることとなる伏線として置かれているのである。「山ねこ拝」の葉書は二度と来てはならないのであり、そのことを一郎は知っているのにもかかわらず、懐かしさを確かめ、その意味を反趨し、現実世界でもその必要性を考え、実行する可能性を考えている姿勢と捉えたいのである。トリックスターとしての宿命といつてもいいのである。周縁にいる者が時として中央を活性化することはあっても、また大きな犠牲をともなつてスケープゴート⁽¹¹⁾にされるのであるから。したがって、一郎は二度と呼ばれることはなく、決して行ってはならないのである。もし仮に行くことがあるとすれば、それは一郎ではなく、他の異人・トリックスターでなければならないことになる。

以上、「どんぐりと山猫」における一郎の持つ役割について論究した。

「どんぐりと山猫」とつながる作品に「ひのきとひなげし」がある。この作品

は、昭和八年の夏に最終手入れがされたと推定されるが⁽¹²⁾、その作品に冒頭は次のようになっている。

ひなげしはみんなまっ赤に燃え上がり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないやうでした。そのひなげしのうしろの方で、やっぱり風に髪もからだも、いちめんもまれて立ちながら若いひにきが云ひました。

「おまへたちはみんなまっ赤な帆船でね、いまがあらしのとこなんだ」

「いやあだ、あたしら、そんな帆船やなんかぢゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。」ひなげしどもは、みんないっしょに云ひました。

「そして向ふに居るのはな、もうみがきたてに燃えたての銅（あかがね）づくりのいきものなんだ。」

「いやあだ、お日さま、そんなあかがねなんかぢゃないわ。せだけ高くてばかあなひのき。」ひなげしどもはみんないっしょに叫びます。

ところがこのときお日さまは、さっさっさっと大きな呼吸を四五へんついでり色をした山に入ってしまうしました。

風が一さうはげしくなるとひのきもまるで青黒馬のしっぽのやう、ひなげしどもはみな熱病にかゝったやうてんでに何かうはごとを、南の風に云ったのですが風はてんから相手にせずどしどしどし向ふへかけぬけます。

ひなげしどもはそこですこうしじまりました。東には大きな立派な雲の峰が少し青ざめて四つならんで立ちました。

「あゝつまらないつまらない、もう一生合唱手（コーラス）だわ。いちど女王（スター）にしてくれたら、あしたは死んでもいゝんだけど。」

となりの黒斑のはいった花がすぐ引きとって云ひました。

「それはもちろんあたしもさうよ。だってスターにならなくてどうせあしたは死ぬんだわ。」

「あら、いくらスターでなくってもあなたの位立派ならもうそれだけでたくさんだわ。」

「うそうそ、とてもつまんない、そりゃあたしいくらかあなたよりあたしの方がいゝわねえ。わたしもやっぱりさう思ってよ。けどテクラさんどうでせう。」

まるで及びもつかないわ。あおいチョツキの虻さんでも黄のだんだらの蜂めまでみなまっさきにあっちへ行くわ。」

向ふの葵の花壇から悪魔が小さな蛙にばけて、ベートーベンの着たやうな青いフロックコートを羽織りそれに新月よりもけだかいばら娘に仕立てた自分の弟子の手を引いて、大変あわてた風をしてやって来たのです。

つまり、ここに見られるのは、どんぐり達の争いと同質の問題があることである。ひなげしは、美しくありたいとの願望であり、「いちど女王（スター）にしてくれたら、あしたは死んでもいいんだけど。」というのである。したがって、悪魔にうまく利用されて騙されることになる。「ひのきとひなげし」の初期形は、次のように物語が展開する。その冒頭を取り上げ、検討する。

ひなげしはまっかに燃えあがり、ゆらいで乱れてひらめいて、まるであらしの海の中のたくさんの赤い帆船のやうです。

その向ふに一本の黒いひのきが立ちました。

夕日はひのきの梢で、みがきたてのあかがねの盾のように光ってゐます。それもあかがねのいきもののやうです。そして、もうサッサツとさわやかな呼吸を五六ぺんして、すうと西の山に落ちて行きました。

南のうち蒼い空から、風がザアッと吹いて来て、ひのきに何かさゝやきました。

ひのきはたゞ一言、「はらぎゃあてい。」と答へました。

〔初期形〕と、書き改めや内容の追加された「ひのきとひなげし」とを比較すると分明のように〔初期形〕の方がひのきの宗教的性格づけが明確であり、ひなげし同士が、美しさを競い合っている様子が明確であり、その意味では、「どんぐりと山猫」の世界に類似するものがある。ここで、ひのきが、ひなげしに語ったことを〔初期形〕をもとに次に紹介する。

「みなさんはあぶないところでした。みなさんはもうすこしで、永久につちぐりのやうな花にされる所でした。みなさんはそれでもいいと思つてゐます。けれども現にみなさんは、むしろある時は太陽のやうにいかゞやいた時もある

たのです。どなたかそれをおぼえてみますか。そして今幸福ですか。こゝろをしづめてほんのしばらく私のことばをお聞きなさい。

私は沢山の美しかった人たちを知っています。あの去年「暁」と名づけられ、もろもろの花の王とたゞへられ、欧字の新聞や雑誌にまでその肖像をかゞげられた黄薔薇のことをみなさんはお聞きでせう。私はあの花がどうしてあんなに立派になったかをこゝでちゃんと見てみました。あの花の魂が、まだ、ばらにならなかった前は、それはそれはあはれな小さいげんのしょうこだったのです。けれどもその小さな白い花は、決してほかの花をそねんだことがありませんでした。十五日ほどのみぢかな一生を、ほかの大きな葉や花のかげでしずかにつゞましく送ったのです。そのしづけさつゞましき、安らかさけだかさこそはあの美しい黄ばらに咲いたのです。どんなあらしもあの花を傷（きづつ）けることができなかつたでせう。たとへ主人があんなに大切にしくなくても、あの花には火の中でしほれないほどの徳があったのです。又私は名高い印度のカニシカ王が四つの海の水を金の浄瓶から頭に灌がれる日、王によって手づから善逝（すがた）に奉られた二茎の青蓮華のことを聞いています。このかだかい二人は、前は海の向ふの青い野原のまん中に沢山の仲間と一所に咲いた二つのつめくさの花でした。ある夜、そらが黒く、地面も黒く、剽悍な旅人が道を失ひ、野牛が淋しさに荒れ狂ふとき、小さな二人はあらん限りの力を出して、微かな青白い花の灯をともしたのでした。あゝそれこそは、璽路をかざり霜のうすものをつけたあの国の貴人たちに、うやまはれ尊ばれた二茎の青蓮華になったのでした。

これらの花はみな幸福でした。そんなに尊ばれても、その美しさをほこることをしませんでしたから、今は恐らくみなかゞやく天上の花でせう。

けれども私は又美しい花のあわれな物語も知っています。

ある花は美しいといふひことが、何か自分にくつついて、いつまでも離れないもののやうに考へました。ある花は美しいといふことがすなはち自分なのだと思つたりしました。

これらの花は、もうその時から、美しさの小さな泉をからしてゐたのです。

おろかなものは、それを美しいとたゞへましたが、賢人たちはその美しさの

裏側に、縦横に刻まれた悪い皺や、あやしいねたみのしろびかりを見るにたえずまなこをそむけてゐたのです。

あゝ、すべてうつくしいといふことは善逝からだけ来ます。善逝に叶ひ善逝に至るについて美しさは起るのです。」

つまり、ひのきがひなげしにいったことばである。「めくらぶどうと虹」でも同様なことをいっている。競争することの愚かさを説き、美しさの裏側にある悪い皺、あるいは妬みから眼を背けてはならない、と主張する。「すべてのうつくしいといふことは善逝に至り善逝からだけ来ます。善逝に叶ひ善逝に至るについて美しさは起る。」と強調する。

[初期形]の終わりは次のようになっている。

ひなげしは、みな、しいんとして居りました。

ひのきは、まただまって、たそがれのそらを仰ぎました。

西のそらは今かゞやきを納め、東の雲の峰はだんだん崩れて、そこから波羅密と云ふ銀の一つ星がまたゞき出しました。

ここにあるのは、自然の彼方にある宗教的世界・宇宙であり、星を見て星を仏と把握する賢治の心性が仄見えることである。賢治の心の世界に覗き見るのには、[初期形]がよいことは当然であり、童話作品の凝縮度となると、昭和8年に書かれたと推定される作品の方がよい、といえる。にもかかわらず、賢治の作品の底流を揺曳する思想の遍歴を掬い取るには、[初期形]が参考になる。いや、この作品に捨て難い魅力を感じるのは筆者だけであらうか。

賢治が描く「デクノボウ」像は、① 度十型、② 小十郎型、③ 山男型の三類型に分類される。①の度十型は、宗教的であり、「十力」を意識し、その「菩薩性」が問題とされる。3月20日前後と推定される保阪嘉内あての封書に、次のように書かれていることに一つの示唆があると思われる。

……保阪さん。みんなと一緒になくても仕方ありません。どうか諸共だけに私共丈けでも、暫らくの間は静に深く無上の法を得る為に一心に旅をして行かうではありませんか。やがて私共が一切の現象を自己の中に抱蔵する

事ができる様になったらその時こそは高く高く叫び起き上がり、誤れる哲学やご都合次第の道徳を何の苦もなく破って行かうではありませんか。私の遠い先生は三十二かものなりになって始めてみんなの為に説き出しました。保阪さん、私共は今若いので一寸すると、始め真実の心からやり出した事もいつの間にか大きな魔に巢を食はれて居る事があります。何とかして純な、真の人々を憐れむ心から統べての事をして行きたいものです。そうする事ばかりがまた私共自身を救ふの道でせう。(中略)・・・元来妙法蓮華經が書いた妙法蓮華經です。あゝ生はこれ法性の生、死はこれ法性の死と云ひます。只南無妙法蓮華經只南無法蓮華經

至心に帰命し奉る万物最大幸福の根原妙法蓮華經 至心に頂礼し奉る三世諸仏の眼目妙法蓮華經不可思議の妙法蓮華經もて供養し奉る一切現象の当体妙法蓮華經

保阪さん、私は愚かな鈍いものです。求めて疑って何物をも得ません。遂にけれども一切を得ます。我れこれ一切なるが故に悟った様な事を云ふではありません。南無妙法蓮華經と一度叫ぶときには世界と我と共に不可思議の光に包まれるのです。あゝその光はどんな光か私は知りません、只斯の如くに唱へて輝く光です。南無妙法蓮華經南無法蓮華經 どうかどうか保阪さん、すぐに唱へと下さいとは願へないのかも知れません。先づあの赤い経巻は一切衆生の帰趣である事を幾分なりとも御信じ下され本氣に一品でも御読み下さい。そして私にも教えて下さい。

この手紙で「私の遠い先生」とは日蓮が、建長五(1253)年、32歳の時はじめて、清澄寺で開教立宗したことを指すものであり、「赤い経巻」とは、島地大等編『漢和对照 妙法蓮華經』のことであり、賢治の父親・政次郎へ信仰上の先輩高橋勘太郎から贈呈された本(大正3年8月28日、明治書院発行の初版本。赤布装)が、賢治から保阪に送られたものであるという。賢治が自分の信仰を定めるきっかけを得た本を保阪に送った行為そのものの意味は深く、その一つには保阪が大正7年3月13日(終業式、進級決定日)付けで、「除名」処分を受けたことに対する衝撃の深さもあるのかも知れない。これほど、賢治の内面をさらけ出して

見せた書簡はそれほど多くはない。『校本全集』第十三巻の校異によれば保阪の除名は、「アザリア会・・・賢治・保阪らが中心となって謄写印刷で「アザリア」（大正6年7月から7年6月までの6冊。校本全集 第十四巻所収）を発行した時のグループ。大正7年2月20日発行の第五号に、保阪は「社会と自分」というアフォリズムを発表しているが、その中に「ほんとうにでっかい力。力。力。おれは皇帝だ。おれは神様だ。おい今だ。今だ。帝室をくつがえす時は、ナイヒリズム。」の一節があり、これが筆禍事件として保阪の除籍の要因となった可能性がある。」と、述べられており、そのことを賢治は、自己の問題として悩み、保阪への手紙が多いことが分かり、前掲の手紙に、「新しく書き出します。保阪嘉内は退学になりました。けれども誰が退学になりましたか。又退学になりましたかなりませんか。あなたはそれを御自分の事と御思ひになりますか。誰がそれをあなたの事ときめましたか。又いつきまりましたか。私は斯う思ひます。誰も退学になりません。退学なんと云ふ事はどこにもありません。あなたなんて全体始めから無いものです。けれども又あるのでせう退学になったり今この手紙を見たりして居ます。これは只妙法蓮華経です。妙法蓮華経が退校になりました。妙法蓮華経が手紙を読みます。下手な字でござつと書いてあるらしい手紙を読みます。手紙はもとより誰が手紙ときめた訳でもありません。元来妙法蓮華経が書いた妙法蓮華経です。」と、賢治が書いている手紙の内容をどう解説・解釈するかが問題で、この手紙は賢治の心性の中核にあり、自己犠牲に向かって突っ走る契機を示す内実である。つまり、保阪嘉内は退学をしていない。「あなたなんて全体始めから無いものです」といつつ、「妙法蓮華経が退校になりました」と、論を飛躍させている。「手紙はもとより誰が手紙ときめた訳でもありません。元来妙法蓮華経が書いた妙法蓮華経です。」と述べつつ、ひたすら南無妙法蓮華経と唱題すれば、世界と我とは不可思議な光に包まれると賢治は保阪嘉内を説得しているのであり、ここに存在する賢治の思想を詳細に解説すればするほど、賢治の思想の透明さとともに、死をも超越した激烈な思想を抱持していることは分明である。したがって、この手紙から賢治の描く「菩薩性」の中心思想があると把握している。大正7年3月14日と推定されている保阪嘉内に当てた手紙は、賢治が保阪の退学の事実を知り、動揺し、慟哭する精神を露わにする。「変な奴ばかり多くて出

すまいと思っておりましたが」と述べながら、追伸を同封しており、最後に「妙法蓮華經 方便品第二／妙法蓮華經 如来寿量品第十六／妙法蓮華經 觀世音菩薩普門品第二十四／願はくは此の功徳を普く一切の及ぼし／我等と衆生と智共に仏道を成ぜん」と、賢治の宗教的世界・宇宙を示す。賢治の呟いているお経のことが聞こえて来るようだ。典型的な作品として、「気のいい火山弾」「度十公園林」等があげられる。

以上デクノボウの度十型の原型について述べた。

②の小十郎型のデクノボウ像を検討する。

ここでのデクノボウ像は、「なめとこ山の熊」の小十郎、「オツベルと象」の白象、「黒ぶたう」の小牛、「カイロ団長」のあまがえるに見られる。これらの作品に見られるのは、何れも無抵抗で従順であることである。したがって、自分の世界を離れ、別の世界に入っていく場合、その無抵抗、従順であるが故に悲劇に陥ち込むのである。それぞれの作品における騙される者、騙す者、それらの住む世界は次のようになっている。

作 品 名	騙される方(住む世界)	騙す方 (住む世界)
なめとこ山の熊	小十郎 (なめとこ山)	旦那 (まち)
オツベルと象	白 象 (森)	オツベル (野原のはて仕事場)
黒ぶたう	子 牛 (柵の中)	狐(ベチュラ侯爵の邸)
カイロ団長	あまがえる (屋外)	とのさまがえる (店)

以上のように纏めると、住む世界に共通性がある。騙される者の住む世界は、「やま」であり、騙す者の住む世界は「まち」であることである。「なめとこ山の熊」では、「やま」は理想的世界として描かれる。「なめとこ山の熊は小十郎が好きなのだ。」また、小十郎も「熊どもは殺してはいても決してそれを憎んではない。」のである。それどころか、月の光を浴びている母子の熊の会話の場面では、母子の愛情の深さに心打たれて、その世界を壊すことなく去って行くのである。「オツベルと象」、「カイロ団長」の「やま」の世界も、助け合い、協力し合う関係が確かに存在し、理想的である。

これに対して、「まち」はどのような世界であるのか。「オツベルと象」によっ

て検討する。白象がやって来た時のオツベルと農民達の反応は、「まち」の在り方を象徴的に示す。

そしたらそこへどういうわけか、その、白象がやつて来た。白い象だせ、ペンキ塗つたのでないぜ。どういふわけで来たかつて？そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだらう。

そいつが小屋の入口に、ゆつくり顔を出したとき、百姓どもはぎよつとした。なぜぎとつとした？よくきくねえ、何をしだすか知れないじゃないか。かかり合つては大へんだから、どいつもみな、いつしやうけんめい、じぶんの稲を扱いてゐた。

ところがそのときオツベルは、ならんだ器械のうしろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見た。それからすばやく下を向き、何でもないといふふうで、いままでどほり往つたり来たりしてゐたもんだ。

するとこんどは白象が、片脚床にあげたのだ。百姓どもはぎよつとした。それでも仕事が忙しいし、かかり合つてはひどいから、そつちを見ずに、やつぱり稲を扱いてゐた。

以上のことから分かるようにオツベルの内面はどうであったのか。突如、白象が出現し、百姓同様ぎよつとしたものの、どうしたら、あの白象を手に入れることができるのか、と胸算用した筈である。「力は二十馬力」もあり、「牙はぜんたいきれいな象牙でできてゐる。皮もぜんたい、立派で丈夫な象皮なのだ。」から、オツベルにとって象はもはや生き物ではなく、向こう側から飛び込んで来た商品であり、一儲けできる代物なのだ。つまり「まち」に於いては、利益こそが全てであり、最終の目的なのである。

一方、百姓どもは、無気力、無自覚であり、「かかり合つてはひどいから」という文言からも分かるように「ことなかれ主義」に陥っている。そして、このことも「まち」の一面を示す。

この後、オツベルは、白象に対して、使うことばは、本音と建前を上手に使い分ける。本音と建前が完全に分離して、物事が進行する。百姓達も、オツベルの下で働いているのにもかかわらず、心の交流を全く持たない。最後の場面で、象

の大群が押し寄せて来る極限状況に於いても、オツベルは百姓達を全く統制できないことから分明であろう。

「カイロ団長」に於いても、とのさまがえるは自分で仕事をしない。実際に働く者の立場を無視し、命令だけで人を動かすから、後でしっぺ返しを受けることになる。「まち」に於いては、労働と、支配が完全に分離している。「なめとこ山の熊」の旦那に対する賢治の眼差しは、怒りに震えているように見える。小十郎の笑いと旦那の笑いを比較すれば、小十郎の笑いは、「まちへ熊の皮と胆を売りに行くときのみじめさといったら全く気の毒だった。」とあるように純朴さに溢れた笑いであり、旦那の笑いは、相手が計略にまんまとはまったことに対する「にかにか」笑いであり、社交性を持った笑いでもある。このように「まち」の人間の笑いと、「むら」の人の笑いを鋭く描写できる賢治の感性の豊かさを垣間見ることができる。

以上、小十郎型のデクノボウは、純朴であり、素朴な人間であり、「むら」に根をはった生き方を象徴していると把握できる。

③の山男型に属するデクノボウ像は、「山男の四月」、「祭の晩」、「紫紺染めについて」、「狼森と笹森、盗森」をあげることができるであろう。

まず、山男の容姿について検討する。

作品名	山男の容姿
山男の四月	「金色の眼」「せなかをかかめて」「山男は顔を真っ赤にし、大きな口をにやにやまげてよろこんで」「ばさばさの赤い髪」「肩をまるくして」
祭の晩	「古い白絹の反物にへんな褌のやうなものを着た、顔の骨ばってあかい男で」「その眼はまん円で煤けたやうな黄金いろでした」「大きな手」「広い肩」
紫紺染めについて	「ゆっくりと俵から降りて来たのは黄金色目玉あかつらの西根山の山男でした。背中に大きな桔梗の紋のついた夜具をのっしりと着込んで鼠色の袋のやうな袴をどふっとはいてをりました」「しか爪」
狼森と笹森、盗森	「まんなかには黄金色の目をした顔のまっかな山男があぐらをかいすわってゐました」

賢治の描く山男は、どれも「黄金色の眼」をしており、「まっ赤な顔」という共通点を持っている。柳田國男の『遠野物語』に登場する山男は何れも、子どもを

さらったり、食べたりする恐ろしい存在であり、賢治の作品に登場する山男は純朴で、恥ずかしがりやで、正直で、ユーモアに溢れる存在である。『遠野物語』の山男は何れも、人間が山に入って山男に会うというのに対して、賢治の作品に登場する山男は、何れも、山男が「やま」から「まち」に出て来る。そこで事件が起こり、山男にデクノボウ性を託していることが分かる。人間のずるさに騙されたり、虐められたりしても決して人間を恨むことはなく、かえって、人間の生き方を活性化する機能を抱持している。人間を超越した存在として山男を描く。また、山男が人間を越えた超能力を持っていることを作品から取り出してみる。

紫紺染めについて	<p>みんなが見送らうとあとをついて玄関まで行ったときは山男はもう居ませんでした。 ちゃうど七つ森の一番はじめの森に片脚をかけた所だったので</p>
祭の晩	<p>「山男だ、山男だ」みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしましたが、もうどこへ行ったか、影もかたちも見えませんでした。風がごうごうと吹き出し、まっくろなひのきがゆれ、掛茶屋のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。 木の枝で狐わなをこさえたりしてるそうだ。かふいふ太い木を一本、ずうっと曲げて、それをもう一本の枝でやっとなおさえておいて、その先へ魚などぶら下げて、狐だの熊など取りに来くると、枝にあたってばちんとはねかえって殺すやうにしかけたりしているそうだ。</p>
山男の四月	<p>山男は、金色の眼を皿のやうにし、せなかをかかめて、にしね山のひのき林のなかを兎をねらってあるいていました。ところが、兎はとれないで、山鳥がとれたのです。それは山鳥が、びっくりして飛びあがるころへ、山男が両手をちぢめて、鉄砲だまのやうにからだを投げつけたものですから、山鳥はほんぶんにつぶれてしまいました。</p>

以上のことから分かるように確かに山男は人間にはない超能力を持っているのであり、それ故に、人間に影響を与えることが可能となる。『遠野物語』の山男が非常に恐い、不気味な存在として恐れられ、時として畏敬の念を持たれたように、「やま」の世界は、単に従順であるだけでなく不思議な力の宿るトポスでもある。賢治の山男は、人間の生き方を発展させる存在でありつつ、かつまた、人間の生き方の根元を考えさせる人物像でもあった。

柳田の『遠野物語』の山男と賢治の山男との違いは、賢治が「やま」に対する畏敬の念、つまり、信仰の対象として把握していることに他ならない。したがっ

て、「やま」に住む山男は、仏教的な性格を付与したのである。遠野に住む人々にとっては、山は絶えず眼の前に立ちほだかる存在であり、他の土地に行くにしても、農業をするにしても、あるいは、山の獲物を採るにしても、周りを山に囲まれるといった閉塞状況を生むというのは当然の帰結であろう。それに比べて、賢治の住む花巻は、山を彼方に仰ぎ見る風景が展開され、とりわけ、信仰の対象たり得る雰囲気漂わせている。岩手山の中腹に雲がたなびき、夕陽に照りはえる風景に筆者も我知らず、手を合わせたものである。このように遠野と花巻の風景は違うのであり、それが、賢治の精神的風土を形成したと考えるのは当然であろう。

以上、賢治の作品のいくつかを取り上げ、賢治のデクノボウ像を論究した。

3. デクノボウ像形成にかかわって

「雨ニモマケズ／風ニモマケズ／雪ニモ夏の暑サニモマケヌ／丈夫ナカラダヲモチ／欲ハナク／決シテ瞋ラズ／イツモシヅカニワラツテキル」で始まる「雨ニモマケズ」の詩は人口に膾炙する詩である。賢治はもともと農家の出身ではなく、農民を搾取る側に立ち、農民の犠牲の上に胡座をかいているという罪意識が鮮烈にあったことは識者の指摘するところである。1926年に、あれほど生涯で一番楽しかったと賢治自身が述べる農学校を突如退職し、農民と同じ生活をする事によってのみ、農民と心を通わせることができると考え、日蓮宗の行道一如の実践を自らに課した。自らの理想が挫折したことは、「羅須地人協会」が農民に理解して貰えなかったことであり、賢治が農民として待遇して貰えなかったことは、賢治の心に深い傷を残した。賢治の詩を読めば分かる。当時の状況を示す詩の幾つかを挙げる。

作品番号一〇二〇

野の師父

倒れた稲や萱穂の間

白びかりする水をわたって

この雷と雲のなかに

師父よあなたを訪ねて来れば
あなたは緑に正しく座して
空と原とのけはひをきいてられます
日日に日の出と日の入に
小山のやうに草を刈り
冬も手織の麻を着て
七十年を過ぎ去れば
あなたのせなは松より円く
あなたの指はかじかまり
あなたの額は雨や日や
あらゆる辛苦の図式を刻み
あなたの瞳は洞よりうつろ
この野とそらのあらゆる相は
あなたのなかに復本をもち
それらの変化の方向や
その作物への影響は
たとへば風のことばのやうに
あなたののどにつぶやかれます

(中略)

尚わたくしは
諸仏菩薩の護念によって
あなたが朝ごと誦せられる
かの法華経の寿量の品を
命をもって守らうとするものであります
それでは師父よ
何たる天鼓の轟でせう
何たる光の浄化でせう
わたくしは黙して
あなたに別の礼をばします

以上の「野の師父」は、後年の「雨ニモマケズ」に歌われた世界が既に成熟していることであり、七五、七七の音数律を用いつつ、荘厳な世界を描出する。とりわけ、前半の師父の具体的な姿に賢治が自分の理想像として夢みていることは当然であり、後半に述べられる宗教的宇宙は、何かにとり憑かれている賢治の粘着質の体質が裸わになっている。何れにしても、「雨ニモマケズ」よりも倫理的で文学的な方法である⁽¹³⁾と高い評価を真壁仁がするのも首肯できる。

〔ぢしぼりの蔓〕

一九二七、八、二〇

・・・・・・ぢしぼりの蔓・・・・・・

もう働くな

働くことが却って卑怯なときもある

夜明けの雷雨が

おれの教へた稲をあちこち倒したために

こんなにおちゃくちゃはたらいて

不安をまぎらさうとしてゐるのだ

・・・あゝけれども またあらたしく

雨には黒い死の群像が浮きあがる

春には春には

それは明るい恋愛自身だったでないか・・・

さあ

帰ってすっかりぬれる支度をし

切できちっと頭を縛って出て

青ざめて

こはばったたくさんの顔に

一人づつぶつつかって

火のついたやうにはげましてあるけ

獲れない分は弁償すると答へてあるけ

死んでとれる保険金をその人たちにぶつつけてあるけ

以上の詩からも分明のように、賢治は、農民から厳しい非難を浴びているに違

いない。「どんな手段を用ひても／弁償すると答へてあるけ」に込められている賢治の内面の苦悩は、複雑であり、かつ時として激しい怒りにうち震えていたことは確かであろう。

作品番号「一〇八二」は、賢治の農民に対する姿勢をまざまざと思い浮かべることを可能とする作品である。

〔あすこの田はねえ〕

一九二七，七，一〇，

あすこの田はねえ

あの品種では少し窒素が多過ぎるから

もうきっぱり水を切ってね

三番除草はやめるんだ

．．．．．車をおしながら

遠くからわたくしを見て

走って汗をふいてゐる．．．．．

それからもしこの天候が

これから五日続いたら、

あの枝垂れ葉をねえ、

斯ういふふうな枝垂れ葉をねえ

むしってとってしまふんだ

．．．．．汗を拭く

青田のなかでせわしく額の汗を拭くそのこども．．．

それから いゝかい

今月末にあの稲が君の胸より延びたらねえ

ちやうどシャツの上のボタンを定規にしてねえ

葉尖を刈ってしまふんだ

．．．．．泣いてゐるのか

涙を拭いてゐるのだな．．．．．

．．．．．冬わたくしの講習に来たときは

一年はたらいたあととは云へ

まだかぶやかな苹果のわらひをもってるた
 今日はもう悼ましく汗と日に焼け
 幾日の養蚕の夜にやつれてゐる・・・・

君が自由で設計した
 あの田もすっかり見て来たよ
 陸羽一三二号のはうね
 あれはずゐぶん上手に行った
 肥も少しもむらがないし
 植えかたも育ち工合いもほんたうにいゝ
 硫安だっきみがじぶんで播いたらう
 みんながいろいろ云うだらうが
 あっちは少しも心配がない
 反当二石五斗ならもうきまったやうなものなんだ
 しっかりやるんだよ
 これからの本統の勉強はねえ
 テニスをしてながら 商売の先生から
 きまった時間で習ふことではないんどよ
 きみのやうにさ
 吹雪やわづかな仕事のひまで
 泣きながら
 からだに刻んで行く勉強が
 あたらしい芽をぐんぐん噴いて
 どこまで延びるかわからない
 それがあたらしい時代の百姓全体の学問なんだ
 ちゃ さようなら
 雲からも風からも
 透明なエネルギーが
 そのこどもにそゝぎくだれ

ここには農業に対する熱い思いがあり、それが、「吹雪やわづかな仕事のひまで／泣きながら／からだに刻んで行く勉強が」と、強調するように、このことが、新しい時代の百姓全体の学問であると自信を持って言い切る。この農民は「羅須地人協会」に出入りしていたことは明白であり、それだけに羅須地人協会の賢治の仕事が決して間違っていないとの自信・確信もある。東北の農業が人間をやつれさせることにも心を配り、その深淵から這い出すための展望を持つことができた喜びもある。

次に作品番号「一〇八八」の詩を紹介する。

祈り

一九二七，八，二〇，

倒れた稲を追ひかけて

これからもまだ降るといふのか

一冬鉄道工夫に出たり

身を切るやうな利金を借りて

やうやく肥料もした稲を

まだくしゃくしゃに潰さなければならぬのか

電気会社が

ひなかも点すこのそらのいろ

田ごとにしめも張り直し

かながらの幣さへたてゝ

稔りある秋を待つのに

無心に暗い雨ぐもよ

ここにあるのは、農民の苦悩に共感する、というよりも、農民の苦悩を自分の苦しみと感じて歯ぎしりする賢治の修羅像が浮かび上がって来る。さすがに自然から受ける災害は、我慢するほかない。それだけに苦悩が深いともいえる。だからこそ、「祈り」と題する詩が生まれたのであり、自分の朋友と農民を考えたが故に、深い信仰生活にのめり込んだのである。宗教的救済でなければ農民が救えないという切羽詰まった考えが、やがて、自己犠牲の世界へと急速に駆け込むようになったことはいうまでもない。静謐な「祈り」ではなく、動的・実践的な「祈

り」へと急傾斜するのは当然の帰結であり、誰もとどめることは不可能なのである。

一九三一年の暮れ、賢治は、「くらかけ山の雪」を書く。

〔くらかけ山の雪〕

くらかけ山の雪
 友一人なく
 だぶわがほのかにうちのぞみ
 かすかなのぞみを托するものは
 麻を着
 けらをまとひ
 汗にまみれた村人たちや
 全くも見知らぬ人の
 その人たちに
 たまゆらひらめく
 〔以下空白〕

以上の詩において、賢治は、「同志一人もなく」を抹消したという。賢治の心の深層にある孤独を垣間見る思いがする。詩集『春と修羅』第一集に、詩集と同じ題名で書いた作品がある。そこには、「けらをもとひおれを見るその農夫／ほんたうにおれが見えるのか」と、絶叫したその調子は既になくなっている。〔以下空白〕の持つ世界は深く重たい問いを発し続ける。「かすかなのぞみを托するものは」、確実に「麻を着／けらをもとひ／汗にまみれた村人たちや」である。これも手帳に書き残されたものである。静かな境地とっていいであろう。作品番号「一〇三五」の次の作品にも心惹かれる。

〔えい木偶のぼう〕

一九二七，四，一一，

えい木偶のぼう
 かげらうに足をさらはれ
 桑の枝にひっからまれながら

しゃちほこばって
 おれの仕事を見てやがる
 黒股引きの泥人形め
 川も青いし
 タヌキのそらもひかっているんだ
 はやくみんなかげらふに持ってかれてしまへ

この詩も、賢治の深層意識にあるものには、読者として反感を感じつつも、何か心惹かれるものが残る。一見役立たずの感のあるデクノボウは、我々の日常生活においては、箸にも棒にもかからない人間を指し、賢治の語彙にあるデクノボウは、「アラユルコトラ／ジブンヲカンジョウニ入レズニ／ヨクミキキツワカリ／ソシテワスレズ」の心を持った人間であり、東奔西走しつつ、みんなの幸せなためにけなげに行動できる人間でありたいというのである。「ミンナニデクノボウトヨバレ／ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタンハ／ナリタイ」といわれると、常不輕菩薩のことが想起される。常不輕菩薩は、肉体に対する迫害からは逃げ回っていたが、決して信念は曲げなかった。真の信仰者はどのような状況においても信念を貫き通すのである。常不輕菩薩は、あっちへ逃げ、こっちへ逃げながらも、「人間礼拝による仏性発掘」という菩薩行は、止めることはなかった。そして遂にみんなの心に仏性の芽を吹き出させたのである。誠の信仰とはこのような信仰でなければならない。

賢治は、「気のいい火山弾」のペコ石に常不輕菩薩の在り方を表現し、「セロ弾きのゴーシュ」のゴーシュの家に訪れる動物を常不輕菩薩の化身として役割を付与し、ゴーシュが徐々に仏性を得る過程は、賢治が、修羅意識に悩みつつ、それを超越し、デクノボウの世界を獲得するまでの苦難に満ちた茨の道に通じるものがあると把握するのは、筆者の深読みであろうか。「雨ニモマケズ」の手帳121～124頁に赤鉛筆で書かれた「不輕菩薩」の詩がある。この詩も上掲の常不輕菩薩の説話の世界を掬い取ったものである。

賢治は、農民達との関係において「慢」に悩み、自己の内面に芽生えた修羅意識が押さえきれなかったが故に、詩集『春と修羅』に表出する行為を通して修羅

意識から開放されることを願った。その超越した世界・宇宙が常不輕菩薩のデクノボウ思想であったはずである。

以上、賢治のデクノボウ思想形成の過程に即して論究した。

4. おわりに

確かに、賢治は、妹トシの死によって修羅意識が押え切れなくなっている。身体的にも精神的にもである。賢治の童話に「若い木霊」という作品がある。ベートーベンの「スプリングソナタ」を聞いているような感じを受ける。賢治の使う語彙の背後に音楽を感じるのである。若い木霊の心情の変化を追跡すれば、「おかしいな。おれの胸までどきどき云ひやがる。ふん。」→「若い木霊はその幹に一本づつすきとほる大きな耳をつけて木の中の音を聞きましたがどの樹もしんとして居りました。」→「若い木霊の胸はどきどきして息はその底で火でも燃えてゐるやうに熱くはあはするのです。」→「若い木霊は思はず『アハアハハ』とわらひました。その声はあをぞらの滑らかな石までひびいて行きましたが又それが波になって戻って来たときは木霊はドキッとしていきなり堅く胸を押へました。」→「若い木霊は胸がまるで裂けるばかりに高く鳴り出しましたのでびっくりして確かに聞かれまいかとあたりを見まはしました。その息は鍛冶場のふいごのやう、そしてあんまり熱くて吐いても吐いても吐き切れないのです。」→「若い木霊の胸は酒精で一ぱいのやうになりました。」→「木霊はどきどきする胸を押へてそこらを見まはしましたが……」→「若い木霊は顔のほてるのをごまかして栗の木に幹にそのすきとほる大きな耳をあてました。」と精神の高揚と変化と同時に、自然に生命を付与しつつ、若い木霊自身も再生することを可能とする。若い木霊が春の到来に喜び、春の使者として走り回るのである。若い木霊が火を求め鶴に騙され、自分の原点意識に帰る姿勢は、自己を凝視しつつ、絶えず、何かを求めつつさまよい歩き、規制の枠でなく、自己の主体をかけて行動する賢治の思想の遍歴と重なって見えるのである。胸をわくわくさせながら、たとえ自分は騙されても、その騙した者・物にも仏性を与え続けた常不輕菩薩にも通じるのではないだろうか。賢治の作品に提出されるデクノボウ像は決して他と比較できるような小さな思想ではなく、矛盾をはらみつつも、ダイナミックに成長・発展

するものであると結論づけることができる。大正12年8月、妹を求めての北への旅の結論は、〈特に妹のことを祈らずとも、他の誰をでも祈ることが、そのまま妹を祈ることにほかならない〉の大乗的立場を獲得するのであり、その具現化した像がデクノボウであったと把握できることをもってこの小稿を終える。

(注)

- (1) 谷川徹三『宮沢賢治の世界』（法政大学出版局 1963年11月）6頁。ちなみにこの論文は、昭和19年9月20日東京女子大学における講演を文章化したものである。
- (2) 中村稔『宮沢賢治』（筑摩書房 1972年4月）193頁。中村は、この章を「詩について」とし、その二百十五頁に、つまり、谷川氏が「雨ニモマケズ」を、作者の宗教的心情に心を当てることによって理解し、この作品に「大きな愛の精神にもとづいた願いと祈り」を見ようと言うのである。谷川氏がこの作品に願いと祈りを認めることは自由である。しかし、これは「雨ニモマケズ」の宗教的心情への還元すぎない。決して文学作品としての評価ではないのである。」と強い調子で書き、終始一貫変わることはない。他の詩については高い評価をしていることを付記しておく。
- (3) 谷川徹三『宮沢賢治の世界』（法政大学出版局 1963年11月）昭和34年5月10日、平泉中尊寺における賢治詩碑建立記念講演で述べたものであり、演題は「われはこれ塔建つるもの」となっている。この演題は、賢治の無題の詩、「手は熱く足はなゆれど／われはこれ塔建つるもの／滑り来し時間の軸の／をちこちに美ゆくも成りて／燎々と暗をてらせる／その塔のすがたかしこし／むさぼりて厭かぬ渠ゆゑ／いざここに一基をなさん／正しくて愛しき人ゆゑ／いざさらに一を加へん」から取ったことを講演の冒頭に述べる。さらに、「疾中」の詩には、高熱のために幻視や幻聴の詩が多いことにも触れている。その一つとして、「さめては息もつきあはず／わづかにかからだをうごかすこともできなかったが／つかれきつたねむりのなかでは／わたくしは自由にうごいてゐた／まつしるに雪をかぶつた／巨きな山の岨みちを／黄いろな三角の旗や／鳥の毛をつけた槍をもつて／一列の軍隊がやってくる」を挙げている。前掲書の238頁に、「われはこれ塔建つるもの」の詩を引用しつつ、「雨ニモマケズ」の先駆をなすものとして位置づけている。そして、この詩の批判を一、その詩が自己閉息的で、敗北的である、二、その修辞もそれに準じて古めかしい対過法などを盛んに使って、具体的な現実感を失っている、三、中にはこれはそういう「とかくの批評」を代表する中村稔君の批評で、三の言葉は中村稔君のそのままの言葉の引用だと述べる。
- (4) 境忠一『宮沢賢治論』（桜楓社）111頁に、「〔雨ニモマケズ〕は羅須地人協会、あるいは『農民芸術概論』からの全面的後退というよりも、その理想主義を現実にはききもどし、挫折を通して得た民衆への接近とみることもできる。」と述べ、このような見解を取る研究者、評論家は多い。
- (5) 『文化人類学事典』（弘文堂 1987年2月）の解説によれば、策略をめぐらし、いたづらをして、それまでであった秩序を一時的に破壊するという役割を担って神話や伝承に登場する人物や動物。トリックスターは以下のような特徴を持つ、と解説する。全く徒党を組まず単独に行動する。にもかかわらず、日常的には強い存在ではない。彼がいたづらを

する相手は、神や王であり、教知れぬ大勢の人間であったり、伝統的な行動規範であったりする。そのためには、ずば抜けた知力とずばしこさを持たなければならない。強い者をやっつけると思えば、仕掛けた罠に自分のはまりこむこともある。自分を危うくしたり、妻や子を死に至らしめることもある両義的な性格を持つ。トリックスターは身軽に飛び回り、どんな世界にも行ける。秩序破壊とともに秩序統合の機能をも持つ両義的存在でもある。現在その社会が持っている産物とか制度とかを創造する糸口をつくりだす文化英雄でもある。ラディンのトリックスターは晶文社から刊行されている。一郎が一時的に秩序破壊をしつつ、その社会を活性化したと捉えることは可能である。以上の解説からも分かるように、二度とこのような策略は成功しないことも分明であり、したがって、一郎が面倒な裁判に呼ばれない理由も明確であろう。

- (6) 雑誌「農民芸術」第七号 宮澤賢治特集 37頁。佐藤は、この解説の前に、賢治が常不軽菩薩の文語詩を紹介しつつ、「常不軽菩薩は常に粗末な衣を着て道行く人々を拝んでゐた。それはこの詩にある通り、すべての仏性を拝んだのである。けれども人々はそれをいかり、彼をいやし嘲笑し石を投げた。不軽菩薩は意に介しないで人々の仏性を展くことにつとめた。いはばこの菩薩はまことに愚かな気の利かないデクノボウである。しかしこの菩薩がやがて無上道に達したのである。釈尊は、自分の前身はこのデクノボウである不軽菩薩であったと云はれた。」と述べ、常不菩薩の化身としての賢治を評価する。
- (7) 前掲雑誌 三十七〜三十八頁。佐藤はさらに、詩「屈折率」に賢治が書いている（またアラツデン、洋燈とり）に着目し、アラツデンはデクノボウではないかと主張する。つまり、世界全体の幸福—無上道を求めて進む自分を、賢治は、魔法のランプを取りに行くアラツデンにたとえて考えたことはごく自然であるというのである。
- (8) 栗原敦編『宮沢賢治 童話の宇宙』（有精堂 1990年12月）67頁。
- (9) 柳田國男『毛坊主考』があり、その歴史的な考察、調査した挿話が詳細に書かれており、その先駆的研究としての価値がある。一般的意味として、毛坊主は、地域の中心に住むことなく、周縁に住んでいるのが特徴であり、時として住民の為の犠牲者となることもあった。お寺のない地域にあって、利用価値はあり、農民をしつつ、あるいは乞食坊主がその役割を担うこともあった。特に強調するのは、毛坊主によって中央が活性化される役割もあり、その意味で、トリックスターと類似の役割を持っていることもつけ加えておく。
- (10) 村瀬学『「銀河鉄道の夜」とは何か』（大和書房 1989年7月）256頁。ここで、村瀬は「賢治はこうした構成をもつ作品を創りながら、実は仏典や仏の教義を解説、説教する者たちへの鋭い風刺をやっている感があります。あるいは信仰者として生きようと決意している者にとって、『聖典』というか『聖語』というか、そういうものをただことごととしてひねくりまわしたり、無知な人に横流ししているだけではいけないのだぞ、という自戒をこめているように思われます。」には傾聴すべきものがある。つまり、賢治の宗教は単なる一宗派に拘った見方ではなく、宇宙の意味を内包する宗教であることである。
- (11) 前掲の文化人類学事展によれば、モックキング（模擬王）は本来凝されるべき王の身代りで見なされ、彼は国王の穢れと災厄を一身に背負い、王の安寧のために自らを犠牲とするのであり、このことをスケープゴート（贖罪の山羊）というのである。何れにして

も、儀礼による世界の更新であり、とりわけ、管理の厳しい社会では行なわれることが多い。軍隊のような場所ではしばしば行なわれていた。文化の両犠牲があったことは当然であろう。

- (12) 『校本全集』第十巻 470頁の校異によれば、「本稿の第一二葉に利用された手紙のおもてには、藍インクの大きな字で、次のように記され、そのあと紙面のやく三分の一が空白のままになっている。(これは昭和八年七月十六日宛菊池武雄宛葉書とほぼ同内容であり、その下書断片と見られる。第十三巻参照。この紙を用いていることにより、本作品の最終手入れ時期が昭和八年夏と推定される。)と述べてあることに従った。
- (13) 真壁仁『修羅の渚—宮沢賢治捨遺—』69頁。その71頁に「賢治には『農民 芸術概論』という、詩の形態で書かれた綱要があるが、それにはすべての人がその労働と芸術創造の行為を両立させようとするような、そして労働の中から、職業芸術家が持ち得ない個性ある生命の表現が生まれることの可能であるような理想社会像を描いている。それが不可能な日本農村の現実を知りつくしながら、あえてそれを設計し、その期待に駆り立てようとしたところに、秘められた賢治の変革の意志を見ることができる。実際の農民指導と、理想社会実現の間の深く大きい距離を、詩および童話の創造と生活形の上でみたそうとしたのが、宮沢賢治生涯の宿題であった。いたずらに菩薩として偶像化してあがめるよりも、詩人賢治の人間の苦悩と、積極的な行動精神を知ることが、そこで大切なわけである。」と述べる箇所は、賢治理解の在り方について示唆するところが多い。結論的には、二つの世界で引き裂かれた賢治の宇宙を正しく受けとめつつ、今の人間が見失っている生き方を考える縁としたいものである。つまり、社会の枠組みを越えて生きることの意味を鮮烈に教えてくれるであろう。時代の発するメッセージを越える展望を持つことの可能な世界が開示されるであろう。